

これまで「奇跡物語」について書いてきましたが、ある読者の方から、「みねさん、結局『奇跡物語』って本当にあったことなの、それとも作り話なの？ どっち?!」— という質問をいただきました。今回はそれについて書いてみます。

🔑 〈奇跡〉物語 (3)

イエスはどのような〈奇跡〉を行ったか

大貫 隆先生によると、『マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネの4福音書には、合計約 50 にのぼるイエスの奇跡行為』が書かれているといます。この中には〈同じ話〉が、二つ、三つ、あるいは四つの福音書に重複して出てくる場合があるので、『奇跡行為の中身を基準に考え直せば、(中略) 23 通りになる』そうです。

先生は 23 の奇跡行為を、次のように分類しています。

※(A)は主なものを挙げました。()内は、四福音書名と章・節です。ぜひ『聖書』でご確認ください。

(A) 病気、^{あくれいっ}悪霊憑き、さまざまな身体障害を対象とするもの〈16例〉

- ・重い皮膚病を患った人の癒し・中風患者の癒し・長血の女の癒し (以上、第 37 回参照)
- ・耳が聞こえず、口が利けない男の癒し(マルコ 7.31~37、マタイ 15.29~31)
- ・悪霊に憑かれた男児の癒し(マルコ 9.14~29、マタイ 17.14~21、ルカ 9.37~43)
- ・腰の曲がった女の癒し(安息日)(ルカ 13.10~17)
- ・水腫の人を癒す(安息日)(ルカ 14.1~6)
- ・エリコの盲人の癒し(マルコ 10.46~52、マタイ 20.29~34、ルカ 18.35~43) (他 10 例あり)

(B) 自然現象(死を含む)に関わるもの〈5例〉

- ・嵐を鎮める(マルコ 4.35~41、マタイ 8.18、23~27、ルカ 8.22~25)
- ・湖上歩行の奇跡(マルコ 6.45~52、マタイ 14.22~32、ヨハネ 6.16~21)
- ・カナでの婚姻(ヨハネ 2.1~11) ・ラザロの甦り(ヨハネ 11.1~44)
- ・ナインの若者の甦り(ルカ 7.11~17)

(C) そのどちらともいえないもの〈2例〉

- ・4,000 人の給食(マルコ 8.1~10、マタイ 15.32~39)
- ・5,000 人の給食(マルコ 6.30~44、マタイ 14.13~21、ルカ 9.10~17、ヨハネ 6.1~15)

(第 34 回参照)

〈奇跡物語〉は「史実」か、「作り話」か

さあ、おまちどうさまでした。上記の〈奇跡物語〉は、「史実」か、それとも「作り話」か — を大貫先生にお聞きしてみます。(傍線は筆者。以下同様。)

『もし近代科学の法則だけを基準にして、これらの話が「本当」か「嘘」か、「史実」か「作り話」か判別せよと言うのであれば、どの話ももちろん「嘘の作り話」である。特に(B)と(C)についてそうである』。さらに続けて、

『五つ、あるいは七つのパン切れと二匹の魚で四、五千の人間たちを満腹させること、湖水の上を歩くこと、嵐を一喝の下に鎮めること、(中略) ましてや死人を甦らせることが不可能であることは、今も昔も変わらない。昔も今と同じ自然法則が貫徹していたことは、たとえその発見はまだだったとしても、間違いないのだから』。

そしてダメを押すように、

『(B)と(C)に属するこれらの奇跡物語は、イエスの死後の原始教会が、自分たちの救い主・神の子・イエス＝キリストが超人間的な神的存在であったことを言うために、部分的に旧約聖書やヘレニズム世界の類話を参照しながら、紡ぎ出した物語なのである』。

(B)・(C) グループの奇跡は「嘘、作り話」である — と断言なさっています。

—— とつぜんですが … **みねさんと** (未信者の読者の「キリュウ(桐生)語」による【ナイショ話】) ——

読者 A 「ねえねえ、みねさんよお、こんなこと書いちゃって、いいんかい(いいのか)?」

みね 「書いちゃっていいんかい、って言われたって、大貫先生がこうお書きになってんだから、しょうがねえだんべい(だろう)。」

【⑩井上ひさし氏の傑作小説『吉里吉里人』によると、キリュウ語(あるいは広義には「群馬弁」)の男子の多くが会話の語尾に用いる「だんべ」は、東北地方の一部地域では男性の「たいせつなモノ」を指すようです。そこで、この会話ではそのあとに小さな「い」を付けて、東北地方の一部地域の方々に誤解のないようにいたします。通常会話で「い」を付ける上州っ子は、わたしが知る限りほとんどいません。「～だんべが(な)」と、「が」や「がな」を加える人は多いかもしれません。「そうだんべがな(そうだろうか!)」というように。ちなみに手元にあった『大辞泉』、『広辞苑』では、『だんべい』の項目はありますが、『だんべ』はありませんでした。ご参考までに。】

読者 B 「でもさア、これ読んでん(読んでいるのは)、これからキリスト教を学んでみてエ(みたい)人とか、まだ洗礼を受けて間もねえ(ない)人たちなんじゃねエの?」

みね 「うん、そうだんべいな(そうだろうな)。」

読者 B 「じゃあさア、なおさらこんな事さア、書かない方がいいじゃねエの。」

読者 C 「そうだよな、書き直しなよ。オレだったら、キリスト教を知りてエなんて気持ちはスッ飛んじゃうデ。おまけに洗礼を受けちゃった人はさア、後悔しちやあかもしんねエで(てしまうかもしれないよ)。」

読者 D 「悪いこと言わないからサ、やめときなさいよ。この原稿、ボツにされちゃうわよ!」。

みね 「そうかもしれないねえ …。キリスト教の教えで、中心になるものの一つだもんな、「奇跡物語」は、『それは〈嘘の作り話〉だ』って書いてあったら、神父様や先輩の信者さんたち、ドギマギしちゃうかも …。」

読者 E 「あたりめエ(あたりまえ)だんべい、それどころか『おめエ(おまえ)なんか、教会来んなっ!』って言われちゃ〜デ。」

読者 A 「そんじゃ(それでは)、38回は書き直しすべエ(しよう)! 決まりッ!」

みね 「う〜ん …。あつ、忘れてたい! ちっと(ちょっと)待ってくれ! 肝心なこと、これから書くんだった。またあとで話すべエ。」

イエスは〈奇跡〉を行ったのか

では、〈A〉グループについてはどうなのでしょう。

大貫先生は、「癒しの奇跡」が 16 例あることに注目し、『これだけの数が揃うと、たとえその多

くが現在読むことができる形では多分に、「嘘の作り話」であっても、その発端は、生前のイエス、が実際に、しかも繰り返し、さまざまな心身の病気や障害を負った人々に一定の治癒行為を行ったことにあると考えざるを得ない。この意味での史実性を否定することができない点で、(B) (C) グループとは違う』と書いておられます。

福音書記者たちが多くの「いやしの奇跡」を書きとめたのは、イエスが病人やハンディキャップを負った人々に対して、実際に治癒行為を行ったからであり、歴史の事実として、こうした「奇跡行為」がまったくなかったということは考えられないということです。

また、佐藤 ^{みかく} 研先生はイエスにある種の治癒能力があったと想定します。『こういう人はめずらしいかもしれないけれど、確かに存在します。ですから、そういう能力をイエスがもっていなかったとはいえないという意味で、イエスの治癒能力をある程度想定してかまわないと思います』。そして、いちばん大事なことは『イエスがこういう治癒を行ったということの意味そのもの』であるという受けとめ方を示しておられます。

〈奇跡〉は、「神の国(支配)」が始まっていることを語っている

『癩病患者の癒し』の話に戻ります。大貫先生は、『イエスは本当にらい病を治したのか、と問うことは全く意味がない』、そして『語り手自身にとっても、「本当に」自分の病気が治ったかどうかは、どうでもよいこと』とさえ書いておられます。

なぜ「イエスが病を本当に治したのか」という問いが、「どうでもよいこと」なのでしょう。それはすでにご紹介したように、病は「罪」の結果と断罪され、実生活でも差別・隔離されるという「二重の苦難」を強いられた患者たちが、イエスに出会って「解放」され（「イエス経験」）、社会復帰を勧められたことこそ、彼らにとって〈奇跡〉だったからだ、という先生のお考えがあります。

大貫先生は〈治癒奇跡物語〉の多くが、奇跡的な解放を経験した者たちが自分たちの経験を『もう一度言葉によって創造し直し、作り直すことによって、イエスから与えられた新たな生への力を確かめ、それを人にも伝えようとしたところに生まれたもの』であり、『それは確かに「嘘の作り話」ではあるが、しかし、生きるための必死の「作り話」であった』とします。そして、『近代科学に飼いならされた知識に照らしてそれを「嘘」だと断定することほど、幼稚で不毛な読み方はない』と。

前回の『(イエスが)自分のもとに「命がけ」でやってきた人間と出会うことによって生じた「神の国」＝「神さまが取り仕切る空間」のダイナミズムが人々をいやす』のだという佐藤先生と同様に、大貫先生も『イエス自身は、自分が現に宣べ伝えつつある「神の国」がどのようなものであるかを象徴的に示すと同時に、それを地上に拡大してゆくために病人を癒していった』と読み取っておられます。

今回、冒頭に書きました「イエスは奇跡を起こしたのか、否か」という問いは、イエスが伝えたい真理を知るうえでは本質的な問題ではなく、取るに足らない事がらということになります。

—— みねさんと(未信者の)読者の「キリュウ(桐生)語」による【ナイショ話】 つづき ——

読者 A 「なるほどね。イエスは奇跡を起こした可能性はあるってことか。」

読者 D 「起こしたか、起こせなかったかという問題はあんまり重要じゃないのネ。」

みね 「うん、そういうことになるよな。」

読者 B 「ところでさア、みねさんはこの奇跡物語をどう思っただの(思っているの)? えれエ(えらい)

先生方の話ばっか(ばかり)で、ちっと(ちょっと)つかれちゃったい。」

みね 「う～ん、オレは誤解をおそれずに言えば、『どっちでも、かまアねエ(かまわない)』ってとこかな。」

読者 C 「うひゃッ、ゼエぶん(ずいぶん)いい加減じゃねエの。洗礼受けるめエに(前に)考えたこと、なかったんかヨ？」

みね 「そりゃ少しは考えたけど…。つまり、〈奇跡物語〉ってエのは、『新約聖書』全体の、あるいはイエスの言動の〈一部分〉なんだよな。奇跡物語がオレたちに伝えたいことの内容は、聖書のほかの箇所にもたくさん書かれているんだよ。だからオレにとってはサ、奇跡を起こしたとか、起こさなかった、っていうことは〈イエスを信じるか否か〉を考える上で、決定的な決断要素にはなんねエんだ(ならないんだ)ヨ。」

読者 E 「じゃあ、イエスの復活とかさア、マリアさんが処女で身ごもったっていう話もかい？」

みね 「そうだなあ…。そういうことも、本当か・ウソかなんて、深く考えなかったなあ…。」

読者 A 「そんじゃ(それでは)、なにが洗礼を受けようと思った決定的なことだったん(だったのか)？」

みね 「う～ん、これもいろいろあるんだけど…。井上ひさしさんが『私にとって、宗教は、教義よりも人なのである』と言ってるんだヨ。15歳の頃入った仙台の児童養護施設でさア、面倒をみてくれた修道士さんたちの献身的な働きを見て、神の存在を信じている彼らを信じて洗礼を受けたんだってサ。オレも井上先生と同じで、遠藤周作さんや杉山好先生、そして、マキシミアン・マリア・コルベ神父様の三人の「人たち」に出会ったことが、いちばん大きかったなあ。

だから、教義の一つひとつをていねいに調べて、全部納得したから洗礼を受けたんじゃないんサ。すべて納得するなんて、誰もできねエ(できない)んじゃねエのかなあ。たぶん多くの信者さんたちだって、おんなじ(同じ)だと思うヨ。他の宗教を信じている人たちだって、その宗派の教義を全部知って納得して信じたって人は、ほとんどいねエ(いない)んじゃねエの。『信仰を持つことは、ひとつの〈飛躍〉だ』って書いてあった本もあったよ。このことについては、またあとで書くつもりなんだけど。」

読者 D 「確かにそうかもしれないわね。私の家は仏教だけど、その教えの中身なんかほとんど知らないもの。法事があったとき、お坊さんから話を聞いて、『ああ私の家の宗教って、そんな教えがあったんだ…』って思うくらいだもん(だもの)。〈飛躍〉って話、あとで必ず書いてネ。」

みね 「ああ、そのうちに書くよ。」

これまで主に、大貫 隆先生と佐藤 研^{みかく}先生というプロテスタントのお二人の著書から引用しながら、「奇跡物語」を考えてきました。「奇跡」の中のいくつかは、「イエスが実際に行った」ことであり、また、それが〈事実〉かどうかを追及するより、そこに秘められたメッセージを知ることこそ大切だということです。

今回は、カトリック司祭の雨宮 慧^{きとし}先生に助けをいただきながら、「奇跡物語」のまとめをしようと思います。〈奇跡行為〉を確信できる聖書の箇所があると、雨宮先生はおっしゃっています。

【引用・参考にした書籍】 ・佐藤 研『イエスの父はいつ死んだか 講演・論文集』より「第8章 イエスの福音といやしのみわざ」 ・大貫 隆『イエスという経験』より「第V章 イエスの生活と行動」 ・雨宮 慧『なぜ聖書は奇跡物語を語るのか』 ・笹沢 信『ひさし伝』(新潮社、2012)